

成人向
同人誌

BLACK CAT HUMILIATION

—黒猫凌辱。あるいは俺と黒猫の楽しい時間。—

楓のはらわた
ILLUSTRATION: おおたけし
Text: 武藤礼恵

成人向
同人誌

BLACK CAT HUMILIATION

—黒猫凌辱。あるいは俺と黒猫の楽しい時間。—

楓のはらわた
ILLUSTRATION: おおたけし

Text: 武藤礼恵

あの女に勝った、と思う人は多いだろう。だが、事実は違う。あの女に勝った、などという事象は存在しない。

それはあまりに穿った見方だ。

そもそも彼、高坂京介と私の間に障害は無い。強いていうなら私の気持ちだけだろうか。

その気持ちの壁を乗り越えるのに、そんな力がいらなかったとは正直驚いた。

私にはまだ意志の力——「三」が残っていたのだ。てつきり堕ちた時から失われたと思ったのだが、心には無限の力がある、ということだろうか。

だが、空しいかな。心の力だけでは世界、森羅万象全ての悲しみを打ち消すことは出来ない。結果的に私は勝利したのだ、と穿った見方をする者たちの卑しい心を安堵させることはできない。

そして、私の友——と、呼ぶにはあまりに共感できない存在ではあるが——を納得させることはできないのだ。

あの女は自分の敗北を認めないし、事実を認めない。そもそも、私が彼を奪わなかったとしても、あの女の性根が満足することは無い。

兄である彼、高坂京介との間にある全ての存在が疎ましく、妬ましい。

さすがに私にも遠慮というのは、ある。あの女に敬意を払う必要は無い。

だが、兄である彼、高坂京介の心と、妹であるあの女への同情的な感情には敬意を払う用意がある。

だからこそ、今、私は彼の部屋に来て、何故かSNSの更新を続けているのだ。非公開の日記を書いているのだ。この打ちにくい携帯電話のキーを叩いているのだ。

「……何やってるんだ？」

「別に。日課よ」

「俺の部屋に来て日課かよ……はあ、オタクのそーゆーところってのは分からん」

「あなたは少しオタクの習慣に無頓着なの」

「いやあ、ちゃんと合わせてるぜ。アニメ見たり、PCで掲示板実況しながらキターってやつたり、AA貼ったり」

「表層的なところばかり撫でてるのね」

「悪いかよ。俺は、形から入るんだよ」

「だから、コスプレ。納得」

「ぐっ……」

彼のコスプレは悪くない。正直もう少し折り目を正しくすれば相当なレベルのレイヤーになると思う。

あの女が自分の兄を隠蔽しようとしていたのはそういうことも含まれてるのではないかと邪推せざるを得ない。

そう……資質がある。この人は生まれ持っている何かがある。その輝きを私は見つけた。だから、今こうしているのだろうか。

「……まだ、日課か。さっきのツッコミから既に三十分は経過したぞ。携帯の充電電池を突っ込んでも続けなくちゃいけないか」

「ええ。何度でも日課するわ」

「はあ、いつになったらゲームスタートなんだよ」

「ひとり始めれば？」

「あのな！一緒にやろうって提案したのはお前だ！」

「採用したのはあなた。私は提案だけ。しかも聞かれたからよ」

「……へいへい、分かりました。はあ、何だか桐乃と会話しているのと変わらねえな」

「……彼女、元気？」

「しらね」

私と彼、高坂京介が付き合っているという事実を知ったあの女は、特に何か言うわけでもなく家を出て、ひとり暮らしを始めたという。

両親、正しくは父親とは絶縁状態で、家の敷居を跨ぐことを許されていない。

兄である彼は何度も連れ戻そうと思ったが、玄関で追い返される。彼にとって死者覆滅(ターン・アンデット)と同様の魔法の言葉によつて。

——黒いバカ猫とセックスしたの？

その一言で、彼は何も言えない。まったく男というのにはだらしがない。

そして、女というのは、妹というのは度し難いほど愚かだ。

肉欲など今の私には関係ない。この現における数多くある欲望は、ただの兎戯。戯れを主眼とするほど私は愚か者ではない。

あの女に比べれば、私は遙かにクレーバーだ。彼、高坂京介との付き合いを決めたのも、前世からの因縁であり、正しき導きだから認めたのだ。

だが、彼はそうではない。前世の記憶を持たぬ彼は現こそが全てであり、他の可能性に関しては一顧だにしない。

そんな彼に恋愛感情を抱いた？ いや違う。あの女と長くいることで、彼、高坂京介が真の姿に目覚めないことが困るのだ。

私の聖剣の騎士である彼、高坂京介、伏せられた真の名を持つ剣士が私の剣として記憶を取り戻してくれないと――

「――なあ、この小説、続きはあるのか？」

「まだ出てないわ」

「そうか。残念」

「残念？ どうして？」

「いや、面白いからさ」

「面白い……」

「ああ。面白いな。なんか心にビリビリくるぜ」

「そう。あなたもこの面白さが分かるようになったのね」

「いや。正直分かってない。だけど心に響くものがあるんだな」

「そう……」

携帯でSNSの非公開日記を書いている間に彼は私を用意していた小説を読破した。

意外に文字を読むのが早い。私だって、三日ぐらいかかったのに。それとも流し読み？ それは少し失礼よ。

でも……今の反応。感想。

覚醒の時を迎えてるのかも知れない。

もし覚醒の時を迎えてるなら私の隣で運命に抗うことができるはず。

そうすれば……私の望みは確かなものになるだろう。

しかし……あまりにも現を体現しきった精神にこれから起こる戦いの凄まじさを理解しているのだろうか。

「そろそろ携帯弄るのやめろ。ゲームしようぜ」

「……しょうがないわね。いいわよ。わがままな私の彼氏のためにゲームしましょう」

私は彼の隣に座る。

「床でいいのか？ 椅子なら用意して――」

「いいの。ここで。私、結構慣れてるから」

「そ、そうか……でも、服が皺になるんじゃない」

「――」

「そういう気の使い方はいいわ。さあ、始めて」

「おう」

私では入手不能だったゲームを彼、高坂京介に買ってきて貰った。

私の魂の座であるところ、この現の下世話な言葉で言うなら、セカイ系「スレッド」でもてはやされている十八禁ゲーム『妖蟲譚・昏き刃』。

魂に傷を負いし者が取り組むには大変い課題だという。

「しまったなあ、LANケーブルもつと長いのに

すれば良かったぜ」

「ネットには繋がってるんでしょ？ だったらこれでもいいわ」

「その、窮屈じゃないか？」

「別に」

壁際にテーブルを押し込んでの状況に彼はそう呟く。何しろ彼の部屋にはPCはあれども、ネット接続環境は無く、しょうがなくあの女の部屋からLANケーブルを引っ張り出しているのだ。

「ネット接続型の美少女ゲームか……どんなものだろうなあ」

「これまでもユーザーデータでのバトルなどはあったけれど、これはシナリオとCGが解放されていく仕様だそうよ」

「……それって、結構ずるくないか？」

「どうして？」

「だってさ、ネット環境が無かったら百パーセントのものを遊べないんだぜ？ それってお金払った分だけ損してないか？」

「ネット環境無しでこのゲームを遊ぶ人が何処にいるの？」

「え、えーつと、夜の秋葉原駅前でノートパソコンで――」

「そんな人いない……いえ、いたわね。でも、それは例外中の例外。それにそういう人だったら通信機器は常用しているでしょう。さあ、始めて」

「そう……だな。納得だ。よし、スタートだ」

そうして彼はスタートをクリックする。
すぐに物語が始まった。

「……これ、名前入れたのか？」

「どうして？」

「だって、『京介』って書いてあるんだけど」

「デフォルトの名前よ。声優もその名前ですんでくれるわ」

「げっ……お、お前、それを分かって俺にこれをやらそうとしているのか」

「違うわ。私が惹かれたのはこの物語と加筆されていく物語システムよ。名前まで傾注してないわ」

「そ、そうか……すまん」

彼は納得してないようだけれど、半分は事実よ。スレッドで【京介】が【京介】が、と話が出て、どきりとしたのは確かだけれど。

「取り合えずお話しを進めて欲しいわ。私、これを楽しみにネタバレを見ないようにしているんだから」

「了解。じゃあ、始めようか」



私と彼、高坂京介はハラハラと泣いていた。そう、ハラハラと泣く、というのは日本語として正しいことを理解した。まさか十八禁ゲームでこんなに泣くななんて……。

「いい話じゃねえか。っていうか、こんな理不尽

許せねーだろっ！」

「そう……ね。でも、少し熱くなり過ぎ。これは物語。そして、理不尽と戦う術はまだあるわ」

「おう！ 久々に盛り上がりたぜ！ ……と言いたいんだが、どうやったらこの悲劇って回避できるんだ？」

「複雑なフラグのせいで、再現性が難しいみたい。攻略スレッドでも同じような選択しているのに、エンディングが違うと言われているわ」

「……お前ネタバレしないようにしてたんじゃないのか？」

「さつき揉めた選択肢が正しいかどうか知りたかったのよっ！」

「……わ、分かった分かった。そんなに怒るな。選択肢は間違ってたなかつただろ」

「分からないわよ。もう一度試すためにはスキップ機能を使えばいいのよ」

「オーケー」

そうして私たちはゲームを再開し、四時間後遂にベストエンディングを迎えた。

さすがに泣くことは無かつた。目的通りのエンディングだったから。

「……うん、これはノベルゲームでもかなり高い完成度だな。しかし、その、何だ、何か、足り無くないか？」

「エロでしょ」

「い、いや！ そういう風にあからさまに言わなくても！」

「エロはエロよ。確かにエロが薄いと言わざるを得ないわ。何処にあるのかしら？」

「エンディング後にシナリオが増えるんじゃないのか？ お前が話した内容と違つて結構話があつさりしていたように思うけど？」

「そう、ね……多分そう」

また私たちはディスプレイに向かう。

肝心のシーンを見ることが目的なのだから、頑張らないといけない。

そして私たちはそのシーンに辿り着くのに、選択肢を六度変え、場合の数を考慮しながら自分たちの中で最良の結果を得たはずだった。

はず……だったのだが。

「……こ、こ、これは！」

「……っ」

……何と云うことだろうか。

確かにこれは、エロゲー、十八禁と呼ぶに相応しい内容だった。

どろどろぐちよぐちよ。

私の今のボキヤブラリーではそれしか口でできない。いや、具体的に口にしてもいいが、その前に理性が摩滅しそうだった。

「……い、いいの、これ」

「（……こく）」

「えっ……ま、マジかよ。し、しかし、これは……あやせの知り合いのジャーナリストが煽つてたのがあながち間違つてねえって話だよな」

「でも買うのは子供じゃないわ。大人が買うものよ」

「……俺らはそれを強弁できる立場じゃねーぞ」



「昔の偉い漫画家さんは作品の中でこう言った『それはそれ！これはこれ！』と」
「はあ……そうですか。でも、これは……」

彼の喉が鳴るのが聞こえる。

彼は興奮しているのだ。

でも、もし、これが覚醒のきっかけになるのであるならば、私は現の行為に身を委ねよう。

そう……彼の覚醒を促すために。

だけど……もう少し時間が必要。もつと彼が覚醒の方向へと意識を向けられるように。

そのためにはもう三時間必要だった。もうすつかり夜は更け、私たちは見たこと無いやらしいCGを四枚見ていた。

「そ、そろそろ……ね、寝ようかな？」

「まだよ。まだCG回想が埋まってないわ」

「そ、そんなこと言ったってさあ……結構空きがあるし、これってどんどん追加されるんだろ？」

「クリアしないと追加はされない。だから続けましょう。私は『青の導師』の伏線を追いたい」

「まあ……その気持ちは分かるが、俺としてはアキラのちゃんとしたエンディングが見たいし……」

「……あなたは……それを見て……どう思っているの？」

「えっ！ あ、いや、結構酷い話だなあ、って思う」

「そう？」

「そう、って何で疑問形だよ」

「私はこう考えている。この娘たちはそれなりに幸せなんじゃ無いかって」

「へっ？ どうして？」

「……セックスの虜。それが気持ちいい。肉欲に溺れ、宿命や世界や真実から離れてしまう。それでも、気持ちよければ幸せ」

「……でも、さ」

「あなたは……どう？」

そう言っただけは彼、高坂京介の股間をぎゅつと握った。

そこは熱く固く滾っていた。

「……お、おい、おまえ」

「あなたは、セカイの真実を知る義務がある——」

「そ、それって……このゲームのオープニングじゃ——」

「知って。私を通じて。あなたはセカイの真実を知る義務がある——」

「お、おい……く、黒猫……」

ああ……ダメだ。

私の方が先に始めてしまった。

こんなつもりはなかったのに……



「お、おい……そ、そんなこと、しなくていいんだぞ」

「嫌よ。しなくちゃ。『妖蟲譚・昏き刃』で幾つもの口淫のシーンがあったと思うの？」

「え、い、いや、全然埋まってないから分からないけど……」

「そう……ね。でもスレ情報ではかなりの数があるって話よ。それだったらこういうのも悪くないでしょ？」

「あ、あいな……」

「彼女の部屋に口淫オンリーの『メルル』のエロ同人誌があったわ」

「な、何を——」

「彼女、こういうことがしたいんじゃないかしら？」

いけない。挑発はいけない。

人の心をささくれ立たせて、何の意味がある？ それもこの人の妹をダシにして。

「桐乃は……アイツは関係ないだろ」

「そう……ね。ごめんなさい。だから罰するつもりで口を犯して」

「……あいな」

「嫌なのね。でも据え膳食わぬは武士の恥というのよ。それぐらいは分かっているでしょ」

「……分かったよ」

彼は諦めた。ううん、諦めたんじゃない。彼はいつでもそう。前を向いて選択する。

特に、あの女のために。

兄だから。

私が「兄さん」と彼を呼んだのはそれを知っていたからかも知れない。

だけど、今は違う。

私は、この人の恋人。彼、高坂京介の恋人なのだ。



「脱がないわ。このままして頂戴。私、このままセックスがしたい」

「……分かったよ。じゃあパンツは取るぞ」
「ええ……いいわ」

大体脱いだら面倒でしょう？ あなただつてそんな手間よりも私の性器を弄りたいはず。もつともつといやらしいことをして。

そうして本当のあなたを見せて欲しい。彼は私のパンツを下ろして、指を股間へと這わせていく。

びつちよりと濡れた感触に私も彼もちよつと驚いている。

「……あんまりパンツが汚れてなかったからこれは意外だな」
「溜まっていたのよ、内側に」

「……お前冷静だな」

「ええ……あなたと違って——いいえ、冷静じゃないわ。怖い。凄く怖いわ」

「……黒猫」

「当たり前よ。自分の身体がどんどんいやらしくなってる。それで冷静でいられる方がどうかしてるでしょ？」

「そう……だな。俺ができることはお前に怖がらせず最後まですることだな」

「そうよ。分かっているじゃない。どう？ 私の呪い、素敵だと思わない？」

「うん。素敵だよ、黒猫」
「……っ」

正面切つてそう言われると私も言葉が無い。

言葉が無いというか、かなり取ずかしい。

この人はそこまで言いきつてしまう人なのだ。やがて、彼は私の足を広げた。

取ずかしい……いざことが進むと取ずかしくなる。

私の世俗の意識がこの神聖な儀式を妨げている。あつてはならない……あつては……ちゃんと最後までやり遂げなくちゃいけない。

「大丈夫だ。俺に任せろ」
「……ほんとうに？」

「ああ……大丈夫。俺を信じろ」

ふふふ……『MASCHERA』の台詞から持つてくるなんて……素敵よ……ああ……現実と虚構が入り交じつていくなんて……うふふ

……何か……凄い……ああ……

「お、おい……いいのかわ？」

「ええ……いい。して……もうしてもらわないと、元に戻れなくなる」
「分かった」

彼が準備をして、私の中に入るまで……五分とかかしら？ その間に私は何を思うのかしら？
彼の体温を感じる。あつたかい。こんなに気持ちいい……嬉しいの？ 嬉しい。私はずっとこうされたかったのだから。

「入れるぞ。力を抜くんだ」
「抜いてるわ。リラックスしているのよ」

「そうか？ 震えてるぞ」

「ええ……震えてる。だけど、本当にリラックスしているの……だから、入れて」
「よし……じゃあ、入れるよ」

怒張しきつた異物が私の中に入ってくる。

「んんざいっ！ い、いい、痛っ！ 痛い！ んんっ……ぐううっ！ あああっ！ い、痛いいっ！」

「だ、大丈夫か？」

「……平気よ。現の痛みは私にとつてただの快楽……だ、だから……平気よ……ほんとうに、へいさい……んぐうううっ！」

……嘘。こんなに痛い。

繕つてられない。
こんなに痛いの……ど、どうして？ 私の身体、気持ちいいはずなのに……どうして？ オナニーとか、京介に抱かれるだけで、こんなに興奮していたのに……痛いだけって。

「——黒猫、呪い続けてくれ」
「え……な、なんで……」
「いいから……ほら」

突き出される唇。
それを私は自分の唇でそつと触れる。
途端、私の中がいきなりどくんつと弾けた。

「んんっ……ふう……ふんんっ♥んふうっ……はううっ……くううっ、んんっ♥や、

「やあ……あつ！ あああつ！」
「……大丈夫か？」
「う、うん……平気い……平気よお……」

ドキドキが止まらない。

私の中がどんどん熱くなってくる。
これって……言ってみれば快楽の果てなの？

「これで……全部収まったよ。どうだ？ 痛い
か？」

「え……い、痛く……無い……」

「そうか。良かったぜ。あまりにも痛がっている
と、その、俺も、萎えるからさ」

「……ごめんなさい」

「何を謝ってるんだよ？ 俺は今回出来なくても
平気だからさ」

「うん。分かっている。分かっているも謝りたい
の。謝ってしまえば……私が楽になるの」

「そうか。いいよ。だったら謝っておけ。俺は平
気だ。俺を呪ったんだから……な？」

「ええ……そう。私はあなたを呪った。だから
……それをしっかり受け止めて」

私は興奮と幸せの中にいる。

この人を好きで良かった。人を好きになつて
良かった。とてもとても幸せだ。

世界の全てを私は手に入れたような気がする。
だからもつともつと感じさせて欲しい。

「痛くないなら……動くよ」

「ええ……動いて」

私は彼の動きを受け入れる。
まだ、痛い。痛いけど平気。
だって……彼が中にいるんだから。

「黒猫……これ平気か？」

「え……ええ……平気よ……んっ……くう……痛
く、無いもの……平気い」

「よし……じゃあ、もつともつと……その——」
「——犯して」

「え……」
「いいの。犯して。私はあなたの奴隷よ」

「ど、奴隷って……」
「ふふふ……さつき見たでしよ？ 『妖蟲譚・昏
き刃』……ヒロインが凌辱されていく過程を」

「お、おう……」
「そう。今の私は『夜魔の女王』では無い……そ
れは分かかって欲しいわ」

「分かっちゃよ、黒猫」
彼は優しい笑みを浮かべる。
心臓が飛び出してしまえそう。

興奮と感動。
何もかもいっぱいいっぱいになって私の中を
支配していくの。

こんなに幸せになるんだったら、もつともつ
と早くすればよかったのだ。あの女に遠慮なん
かしないで。

「さあ……どうだ？」
「んんきゅう……んふうっ♥ はあっ……くう
……んんっ♥ に、肉欲にい……お、溺れる
のお……は、た、魂の座が……穢れる……か

「無理するなよ」
「無理、何か、し、してないのっ♥ はあ……ん
くう……ふうっ……んんんっ！ あつ！ あ
あつ♥ あああああつ♥」

私の中でびちゃっ♥ びちゃっ♥ といやら
しい体液が漏れ出て、彼の陽物が掻き出して
くのが感じられる。

胎内がじんわりと熱くなってくるのも……一
緒に感じられるのだ。

「く……んんんっ……ふうっ！ ああつ♥ い、
いいっ♥ いいのおっ♥ くう……も、もつ
とおっ……してえっ♥」

「ああ……そのつもりだよ。何しろ一発口に出し
ちゃったからな。結構長く掛かるけど、いいよ
な」

「え、ええ……い、いいわっ！ あつ、あ
ああつ！ くう……んんんっ♥ 凄、気持ちい
いい……あ、アソコお、ジユクジユクって……
気持ちいいっ！」

「ふふふ……気持ちいいんだつたら安心かな」
本当に、気持ちいい！
ロールプレイや演技なんかじゃない。

私の中がこんなに感じられるなんて信じられ
なかつた！
月の物が下りてくる度、自分の中の魂の物語
で置き換えようとしても腹に広がる鈍痛は消え
ないし、汚れていくのも事実だった。

いっそのこと赤ん坊のための器官なんか無く

なつてしまえ！ って何度も思った。赤ちゃん
なんかいらないうって。

でも、今！ この瞬間からは違う！

彼の物を受け止めて、彼のために生命を宿
す！

私は女で良かった！

……歓喜する私の背後で囁く昏い私はバカに
しているけれど。

気高い心？ そんなのどうだつていい。

今は肉欲にまみれていい。一線を越えるため
にあんなエロゲーを持ち出したんだ。

あの女を出し抜くためにここまでやったんだ。

この快楽を貪って何が悪い！

「あつ！ あああつ！ くう……ふう、んんつ、
きゆうつ……んつ！ ひいっ♥ いいいっ♥

いいよおつ、あつ♥ あああつ♥」

「す、すげえ……締め付け……俺の、千切れそ
う」

「ううう……いい、言わないでえつ。は、取ずかし
いっつ……取ずかしいのおつ♥」

「でもさ……んつ！ ああ……いい、いいなあ……

黒猫お、お前の、アソコ……俺の、凄く、締め
付ける」

一言一言句切りながら腰を打ってくる彼。

その必死な雰囲気、私も興奮を高めてくる。

中がドロドロに薄け始め、私の意識も飛び始
める。

快楽がより強い快楽が産み落とされ、大きな
口を開けて私の理性を飲み込んでいく。

ドロドロの快楽だけが私の脳を犯し、薄かせ

ていく。口からは白痴の様に間の抜けた声が放
り出て私を苛む。

既に、理性の私と肉欲の私が分離して、どち
らの自分も本当なのに、どちらかの自分が間
違っているかと卑下している。

「んぐきゆううううううつ、ふうつ、ぐうう
ううつ！ あ、アソコおつ！ アソコおつ、す、
好きいっ！ グチュグチュつてえつ、動いて
るうつ！」

「オマンコか。オマンコいいのかわ？」

「お、オマンコおつ！ そお、オマンコおつ、い
いいっ！ いいのおおつ！ んきゆうつ……
ふうつ……ぐううううううつ！ あああああ

あああああああつ！

「黒猫、下品な言葉遣いだぞ」

「げ、げ、下品でもおつ！ なんでもおつ！ い
いのおつ！ こ、このおつ、気持ちいいの、一
緒に感じて……欲しいのおつ！」

「……分かったよ。俺も黒猫の中が気持ちいい。

黒猫のオマンコの中が、気持ちいいんだよつ！」

「あつ！ あああつ！ きよ、京介えつ！ ああ

あつ！ 京介えつ！ 好きいっ！ 好きいっ！

好きなおおつ！」

——愚かしい。

必死に理性ある、魂の座に座る本当の私は、

この醜態をつまらないものでも見るように鼻で
笑っていた。

だけど私は知っている。
覚醒したがっているこの魂の座であっても、

この快楽の影響下にあることを。

だからこそ私はこのエロゲーを選んだのだ。
魂の座を真に覚醒させるには、今の自分を全て
受け入れるしかないから。

「く……んつ！ く、黒猫っ！ い、イキそうだ
……」

「いい……いいわつ！ イッて、イッて頂戴……
京介が、い、イクところ……私に感じさせて頂
戴つ」

「い、いいのかわ？ な、中だぞ……これだと
中
で——」

「早く……私を覚醒させて……お願い！」

「わ、分かったよ……俺も、男だ……さあ、イク
ぜつ！」

「くう……はあああああつ！ い、い、イ
クつ！ イクつ！ イクううううううううう
うううううううううううううう」

◆ ◆ ◆

「はあ……やんなつた」

あたしはエロムービーを止めた。

こんなのを見たからってバカ兄貴とあの根暗
厨二病の状況が分かる訳じゃないんだ。

だからこんな日記を書くしかない。

今、あたしはひとりだ。

ひとりで、このつまらないマンションに暮ら
している。

自分のコレクションを持ち出すことはやめた。
それじゃあまるつきりあたしが負けて出てきた
ような状態になるじゃない。



それは納得できない。

「……でも、結構面倒だし、お金だって減っちゃったし」

そもそも渡米のせいで随分とお金を使ってしまった。それなのに、あのバカ兄貴と厨二女のせいで部屋を借りるためにギャラを前借りするようなことにまでなってしまったのだ。

あーイライラする！

幸い仕事がバンバン入ってきているから、借りた分プラス、エロゲー購入は難しくない。

だけど……何だろう。この心の中でささくれ立つのは。凄く嫌なんですけど。

「……家、戻った方がいいのかな」

一ヶ月。

ここに払ったお金や、迷惑を掛けた人たちの労力なんか考えたら到底そんなことはできない。彼らは私が出た理由が『兄貴が自分の大嫌いな友人と付き合っているからだ』なんてのは知らない。

親元からの独立と本格的なモデルの仕事、それを叶えるための第一歩というのが建前なのだ。辛くなったから止めます——兄貴とバカ厨二病の状況を知らないままって凄く嫌ですから——ってのは、通用しないのだ。

「もう少し……我慢。はあ……携帯変えちゃったから、メアドも連絡先もみんな無くしちゃったんだよねえ……」

たった一ヶ月で根を上げるのか、高坂桐乃。渡米した時の気持ちを思い出せ。あのバカ厨二と兄貴を振り切るために、その苦い思い出を啜る時なんだ。

——♪

唯一復元したブックマーク先である『オタクっ娘あつまれー』の非公開日記をガチガチ書いていたら着信……まったくツイてない。

「はい？ あ、どーもー！ お世話になっております！ はいっ！ はいっ！ はいっ！ 了解です！ ええ、大丈夫です！ すぐ動きまます！」

ふう……嫌なことは忘れて仕事に打ち込もう。

どうせ何か変わる訳じゃないんだし。

あたしは携帯のフリックを閉じ、仕事の準備を始めた。



——初体験から一日。

『妖蟲譚・昏き刃』のCG回収率は五割を超えた。その五割の殆どが、下品で下世話でいやらしい男のためのものばかりだった。

これの何処が所謂『セカイ系』なのか。何故もてはやされているのか。私にはさっぱりなことばかりだった。

勿論見るべき所はあった。ただの解釈論だが、シナリオライターの愛を感じる点やディレク

ターが頑張った点だ。

だけど、やっぱりベースは男の性欲に重きが置かれ、私には到底ついて行けないものであつて——

「どうした、黒猫？ 動けないのか？」

「ち、ちが、う……く、苦しい……だ、だけえ……んんっ♡」

「……やっぱり少し早かったんじゃないか？」
「ううんっ！ いい、今だからっ！ 今だからあつ、こ、こういうことがあつ、できるのおっ！」

「で、でもさ……お尻で、その、エッチするのは……もつと何か一線、二線超えてからの話——」

「私の魂が今を求めているのっ！」
「わ、分かったって……大声出すな」

「……ごめん、なさい」

……。

何とも説得力が無いが、これは私の魂の座が本来求めていること。

彼女を取り巻く境界を破壊するためには、より強い快楽を与える必要があるのだ。

そして、辿り着いたのがアナルセックスだった。

もつともきっかけは『妖蟲譚・昏き刃』のCGだった。声優が熱演し、CG描写も凄まじく、しかも次々と差分を展開して強烈なシーンを見せつける。

そんなのを目の当たりにして、私も彼も生唾を飲み込まざるを得なかった。

それから私たちは画面と同じことをしよう

彼が演じているのは、『妖蟲譚・昏き刃』の主人公・京介が、裏返った時の状態。闇の力に振り回され、大切なヒロインたちを凌辱する……それが、彼の今現在。

「……くくくくく……さあ、イクぞっ！ おらあっ！」

「んきやああああああああああああああっ♥
ああああああああああああああっ♥ あひい
いひいひいひいっ♥ い、い、イグうううう
ううううううっ♥」



……はん。こんなゲームのどこがいいんだか。ただの凌辱ゲーじゃない。

妹ゲーでもあるっていうけど、全然ぬるい！ 何よ、この兄貴。全然兄貴じゃない。

っていうか、宿命とかあつさり乗り越えるのが、兄妹ってもんでしようがっ！

あーもーたるい！ イベントシーンが多ければいいってものじゃないしっ。

特に！ この厨二エロゲーってば、エロ水増しのような感じがするのよね。肝心のシーンがぐちゃぐちゃドロドロにしていればいい、みたいな。

お陰で妹ゲーの部分がすっかり情緒が無くてつまらないっただけ無いわ。もう少し構成を考えろっての。

「はあ……アイツ、こんなのが面白いって思ってるのね。さいてー」

黒猫のバカが久々に日記の更新をしていたんでチェックしたら、エロゲーを遊んでるって内容だった。

そして、それがコレだって分かった。兄貴のバカタレがアイツと一緒にゲームをやってるかと思うとイライラもマックスになるちゅーの。

「あああああっ！ こんなにイライラしながらゲームするのなんて初めてよ！」

展開のアレっぷりにマウスを何度と無く投げつけた。だけど、せっかく買ったゲームだ。コンプリートしないわけにもいかないだろう。

「うー……こんなのだったら、攻略サイトや攻略Wikiを使って——」

ネット接続して色々調べたけれど、意外にみんな手こずっているらしい。きつとそんなに売れてないからだ——

「……つてえ、完売御礼いつ？ バカじゃないのっ！」

こんなのが完売御礼するならあたしの持っている妹ゲーなんか、社ビルが建つ程売れてるっの！

……初回生産数が少ないだけじゃない？

そう。きつとそうよ。あのバカ黒猫が好むようなゲームだもの。『M A S C H E R A』と同程度の惨状なのよ、きつと。

「はあ……そうだと思ったら随分気分が楽になつてきたわね！ んー……後残りのCGは……三十パーセントがー」

こんなの楽勝じゃん！

よーし……とつと終わらせてあのバカ猫とバカ兄貴をぎゃふんと言わせてやるんだから！ 待つてなさいよ！ あたしの方がエロゲー、得意なんだからっ！

「さて……次の選択肢は、と——」

あたしはメモを片手に攻略を進める。

ふん。選択肢式アドベンチャーなんて攻略の内に入らないわよっ。



「——ふふふ……どうだ、悪夢の王女よ。チンポの味は？」

「……凄いい……凄いわっ！ んんぐう……ち、チンポおっ、チンポおっ、気持ちいいいっ！」

「——んぐう……や、やめろっっておおっ！ だ、ダメえっ！ ダメえっ！ あっ！ ああああああっ！ お、おか、おかしくう、なるうっ！」



画面の中の彼の妹。

それが悲鳴を上げています。

何故なら私の濃縮された魔力の鎧よって性器を抉られているから。

私はその光景を見ながら、腰を使い、空想具現化によって生成されし、イチモツを動かしている。

『ひいひいひいっ！ ま、ま、待つてえっ！

待つてえっ！ あががががああああああ、

ふ、太いっ！ 太過ぎるうっ！』

『うふふ……まだまだ大きくなるけれど、これくらいでいっぱいっばいでしょう？』

『——そうだな。俺がお前に与えた力はそんなものじゃない』

『——きゃああああああああああっ！ だ、だめえっ！ はあああああっ！』

まだ墮ちない。

確か、このキャラは義理の妹だが、従姉妹だったか。あまり目立つたところは無いが、ルートを攻略していく内に実は……というタイプ。

私はあまり好きじゃない。自発的に現象から距離を置けるというのが好きではないのだ。

巻き込まれ、運命を受け入れることこそ人間の中にある小さな諦観だと信じているからだ。

一方的に運命を切り裂いていく脳筋バカが廃れているのに、今更現象から距離を置こうなどと言うのは、おこがましい。

『——なかなか強情だな。俺も力を貸してやる

う』

『ああ……お、おね、お願い……お願いしますっ！』

『——ほら、これでどうだ？ スキュラの節足だ

……これでお前も少しは言うことを聞くだらう』

『——んんぎゃああああああああっ！ や、や、やめてええっ！ んにゃああああああああっ！

又ルヌルがあっんぎゅうううっ……はああああっ！』

彼の手が、ローション塗れの彼の手が私の乳房をぎゅつと扱く。

ローションが摩擦を無くし、そのままずりりと乳首まで抜けきり、私を刺激する。

その感触に私は悲鳴を上げる。こんなに気持ちよくて、どうするのだ？ これから先のプレイに耐えられるのか？

『くらう……きよ、京介えっ♥ お、おね、お願い……強いのおっ……これえっ、強いのおっ！』

『——ふふふ……強いかな？ では、優しくしてやろう。お前に生やしたバフォメットの角がちゃんと機能することが前提だな』

『わ、分かっている……分かっているわ……う、うご、動かせば……いいんでしょうっ！』

私は腰を動かす。

画面の向こうの私も、彼の妹とおぼしきキャラクターを凌辱するため、必死に腰を打っている。

こちら側に彼女は無いし、実際に陽物が生

えたわけではない。

ただ、長いディルドーを自らの膣内に装着して、セックスの真似事をしているのだ。

そして、腰を動かせばディルドーが動き、私の膣内が擦過されて快感が生まれる。

ゾクゾクとした興奮が私の中に広がってくる。

『——きゃあああうううっ！ だ、だめえっ！

あ、兄貴っ、しっかり、しっかりしてよっ！

こんなのでえ……おかしくなっちゃダメえっ！』

『……あれ？ こんな台詞あったか？』

『……興を削がないで。先の選択肢によって台詞周りは変わるでしょ。忘れたの？』

『す、すまん……えーっとおー！ふふふ、じゃあ、もつともつと気持ちよくなりたくてはな』

『どうするの？』

『……こうするさ』

そういうと、彼は私のお尻の穴に指を挿れしてきた。

『やう！ ちょ、ちょつとおっ！ ち、連うっ！ このCGのプレイと違ううっ！』

『いいじゃないか。俺は黒猫にもつと可愛い声を上げさせたいんだよ。この画面で何回セックスしたと思うんだ？』

『た、たかが五回じゃない』

『五回。そうだな。五回だ。だが、他のCGシーンでは多くても二回。CG枚数が百枚超えているんだ。このシーンだけ愛でる理由、あるだろ？』

『……無いわ』

「いいよ。強がるんだ。その方が、このCGシーンらしいプレイになる」

そうやって、彼は脚本である回想シーンを無視してセックスを始めた。

「ほら……黒猫のケツ穴、凄いいことになってるじゃないか」

「や、やだあつ！ か、勝手に現実に引き戻さないでえつー！」

「ふふふ……ダメだ。こんな風に意趣返しばかりでセックスを楽しんでるのが俺の彼女ってのは許せないな」

「い、意趣返しなんかじゃ……無いわつ！」

「じゃあ何だよ？」

「そ、それは……その……あ、あなたにも……もつともつと楽しんで欲しくて……」

「俺を楽しませる？ まったく勘違いするな。俺は今、お前が好きなんだよ。分かってないのは、お前の方だ」

そういうと彼は私のお尻を挿んで、ぐつと腰を落としてくる。

途端、私の中で今までにないほどの快楽が押し寄せる。

「んぐううううつ、おおおおおつ だ、だめえつ♥ お、お尻からあつ、お、オマンコまでえつずきんつてえつ、するうつ♥」

そうやって彼は私のお尻の中で強引にペニスを動かす。

私は悲鳴を上げながら、身体を震わせるだけだった。

「ち、違う……これじゃあ、私がひとりであつ、え、エロいことにい、な、なってるだけでえ——」

「いいだろ、もう。もうすぐCG回収率は百パーセントなんだし……別に急がなくても」

「だ、だけどおつ、こ、これはあつ、んぐうううう……んんんおおおおおおつ！ おおおおおおおつ♥ い、いいいっ♥ 気持ちいいいっ♥」

「ふふふ……いいぞ、黒猫。凄いい締め付けだぞ」

「だ、だめえつ……おおおおおつ！ ぐ、ぐちゃあつてえつ、ぐちゃあつてえつ、な、中があ、いつてるのおつ！」

私は悲鳴を上げた。

でも、彼は止めてくれない。

私のお尻を犯すのを、止めるつもりは無いのだ。

そして、私の中のもうひとりの私もこれに興味し、感動していた。

魂の座が揺らぐほど、この快楽は激しく楽しいモノになっているのだ、という。

だけれど理性の支配を強く受けている今の私にはあまりにも強烈できつすぎる体験だった。

「んぐうううつ♥ おおおおおつ♥ ゆ、許し

てえつ！ もおつ、許してえつ♥ きよ、京介えつ、お、お尻いっ、壊れちゃううつ♥」

「お尻壊れるか？ お尻は正直じゃないか。こんなにピチャピチャにして」

そういうと腰使いを激しくしてみせる。

途端、私の肛門、そして、直腸からぐちゅぐちゅといやらしい粘着音が漏れ出てくるのだ。こんなにお尻が濡れるなんて……信じられない。

「はあつ……あああつ！ や、やめてえつ！ 音出さないでえつ！ こんなにい、いやらしい音が、お尻から出るなんてえつ！」

「出るんだからしようがないじゃないか。ふふふ……そんなに嫌かい？」

「い、嫌よおつ……わ、私い、こんなにいやらしく無いのに……」

「そうなのか？ だとすれば抑圧されているお前が露骨に表に出てきたってことになるな」

「ううう……や、やだあつ、そんなこと言わないで」

「言っておいた方がいいだろ？ 元々のお前が相当なスケベなんだつてのは」

「ううう……ああああああつ♥ くうはああああああああああつ♥ お、お尻いっ、き、気持ちいいいっ♥ しゅごい、気持ちいいいっ♥ んんほおおおおおおつ♥」

脳が溶け出した。

それほど激しい快楽だった。

私の中でどんどん興奮と快楽が肥大化してい



ちいち入れ子にしているのは何なの？ 何でダイレクトに妹じゃダメなのよ」

設定書を読んでもぼんやりとしか分からなかったが、この手のネタが好きな連中（掲示板の奴らだ）は、余裕でこの意味を理解しているみたいだった。

オカルトとか、その地方の民話とか、前提知識が必要なのって作品単体として機能してないと思うんだけど？

「今日日、そういうもんです、で乗り切れたらフィクションとして世話無いつての。あたしらを納得させられないならそもそもオカルトとか民話とか入れんなつての」

バカ猫のSNSの日記が更新されていた。どうやらクリアしたみたいだ。

「ふん。あたしだってクリアしたわよ」

しかし、感想は特にない。ただ『クリアしました』の一文だけ。

あの理屈バカにしてはアツサリし過ぎている。何かあったのだろうか？

「……いいわ、あのバカに物語性の何たるか、キャラクター性の何たるか、妹の何たるかを叩き込んでやる！」

幸い、ここ数日はお父さんの研修旅行でお母さんも一緒に出掛けている。

つまり……兄貴だけが、そして恐らくバカ猫だけがあたしの家にいるってことだ。

「あたしの家で勝手にしているバカ猫に、妹様が鉄拳制裁と説教をくれてやるから覚悟なさいっ！」

SNSの画面に向かってあたしは指を突きつけた。

さて……どんな具合にして説教してやろうかしら。

序でに兄貴にも説教ね。

もつともアイツは一発ぶつ飛ばしてからだぜ。

……でも、なんだろ。

ちよつとだけ楽しくなってきた。



「どうだ？ 黒猫、もうダメか？」

「あつ……ああつ……おおお……おおお……だ、だめえつ……もお……だめえつ♥」

「何だよ……もうグロッキーか」

「だ、だつてえ……な、内臓という内臓があつ、ビクビクしているのよおつ♥ ど、どうしろつてえ……い、いうのよおつ♥」

「……そつが、んじゃ、少し休むか」

「……う、うん……お、お願い……や、休ませてえつ……んんんはううつ♥」

彼は、少しベッドから離れた。

でも、私は動くことができない。

全身の筋肉が完全に弛緩している。

ピクリとも動かない。私の意志では。意志とは関係のない、快楽の反応でびくつくことはあつても、自力で動かすことはできない状態だ。

彼が買い漁ったセックスのための道具はベッドのアチコチに転がっていて、その全てが使用されたことを、私の体液が雄弁に語っている。

「あ……ああ……こ、こんなに、たくさん……私の中に……入ったのお？」

「いや、まだ入っているよ」

そういうと彼は私のお尻の中の異物を動かした。

私は、悲鳴を上げる。

「んぐううう……ひいひいひいっ！ ぬ、ぬ、抜かなれええつ！ な、なに……の、残つてえつ……るのおおつ！」

「あれ？ 感覚無いわけじゃ無いんだね。ふふふ……直腸の先まで押し込んだパイプだよ。凄かったでしょ？」

「だ、だめええつ！ な、内臓があつ、こ、壊れちゃうううつ！ あ、あんなのおつ、もう、使ったらダメええええええええつ♥」

はらわたが引きずり出されるような感触に私は悲鳴を上げた。

だが、すぐに下半身が、内臓の出口がかあつと熱くなる。

さっきまでのプレイで体液など枯れ果てたと思っただが、そんなことは無かった。

奥からまたどくうっ♥ どくうっ♥ と溢れ出てくるのだ。

そして、溢れ出る粘液が私を更に快楽の淵に叩き込む。

「おおおおおおおっ！ ら、らめえっ……ま、まらあつ、まらあつ、しゅ、しゅごいのおおつ、しゅごいのおおつ、きちやううううううううううっ♥」

「ふふふ……ヤバいな、また勃つてきちゃったよ」

「あつ♥ あつ♥ んぐううっ♥ だ、だめえっ……ま、またあつ、い、挿れるのおっ？ 挿れちゃうのおっ？」

「うん。黒猫の声、聞いてたらたまらなくなっただ」

「あつ！ あああつ！ んんんおおおおおっ！ や、やあつ……そ、それえつ、抜いてえつ、ち、チンポおつ、チンポ挿れるのおっ？」

「ああ……コイツを抜いて、チンポを挿れてやるからね」

「ひいひいひいっ♥ だ、だめえっ……こ、今度こそおつ、今度こそおつ、お、お尻いつ、こ、壊れるうっ♥ 壊れちゃううっ♥」

「大丈夫。壊れたってまだまだ気持ちよくなれるさ」

「んぐううっ、ひいひいひいひいひいっ♥ い、いやあつ、ぬ、抜かないでえつ♥ 抜かないでええつ♥ ぬ、抜いたらあつ、ま、またあ、イクうっ……」

「どれ……」

彼は引き抜くの力を入れた。よじれた内臓の中を異物が擦り上げるように轟きながら外へ外へと排泄される。

「んぐふうっ……おおおおおおうううわああっ！ あつ♥ ああつ♥ あああつ♥ お、おひりい、ガバガバ……空気い、流れ込んでくるうっ♥」

「ん？ お尻の穴開き切っちゃって空気入ったのかな？ もしかして、それも気持ちいいのかな？」

「やめえつ、やめてえつ♥ そ、そんなことされたら、お、お腹あ、おかしくなっちゃうよお♥」

「いいだろ？ ほらー！」

「んぎひいひいひいっ、んんあああああああつ、だ、だめえつ♥ ああああああ、凄いいっ♥ 内臓があつ、ぎゅうぎゅううううって、動いてるううっ♥」

内臓なのか、腹膜なのか。いづれにしても刺激と温度のせいで激しく轟いている。そして、その反応が私の脳味噌をぐちゅぐちゅと揺するのだ。

「……ぱっくりしちやつたね。さあ、息を吹き込むよ。——ふう————————！」

「くう、くう、くううう、はああああああつ♥ だ、だめえええええええ——」

私はこれだけのことでイッてしまった。だけど、本当の彼の責めはここからなのだ。何度も息を吹き込むと尿道口からおしっこが

「さて……じゃあ、挿れるよ」

「うううう……い、挿れるのおっ！ 挿れちゃうのおっ？」

「うん……」

彼はそういうと私のお尻の肉を広げる。熱くて固いのが私の肛門に触れる。開き切った肛門と直腸を抉るように彼の陽物が私の内臓を突き進む。

私の身体は電気でも走ったように、反り返り、快感を受け入れる。

「んんきゃあああううううう、おおおとおおおっ♥ あつ♥ ああああつ♥ くひいひいひいひいっ♥ だめええええええええええっ♥」

「んんんっ……柔らけーなあ、黒猫のケツ穴の中。ぐつちよぐつちよで気持ちいいぞ」

「あつ♥ あああつ♥ え、挟らないでえつ……そんなに、挟ったらあつ、お、お尻のおつ、粘膜飛び出しちゃううっ♥」

「ふふふ……もう出ているも同然じゃないか」

そうやって彼は私の肛門の周りを撫で回す。途端、電気が走ったように興奮が私の肛門、そして、性器、脳内を駆け抜けていく。

「きゅうううううううううっ♥ はううっ……ん

■あしがき



にちわ。武藤礼恵です。

『俺の〜』です。原作はちょこちょこ読んでおりました、最初から黒猫派なのですが、今回の話を
内に桐乃は大変書きやすいなあ、と思いました。

ーンでは自分のモチベーションを黒く、凌辱テイストに持たないと駄目そう、って思っていま
いの内容が一番好きかも。

っと思っけそうですね。しかし、最新刊読んでこれを書いたのは無謀かも知れません。

うーん……まさか、あんな風になるとは。

次巻も楽しみです。

では、次回。多分、コミック1です。そろそろオリジナルをやろうかなあ、と思っています。
それでは、また。

■ おくづけ ■

発行：楓のはらわた

著者：おおたけし&武藤礼恵

<http://www.kaede-no-harawata.com/>

2010年12月31日発行

印刷：ニモ印刷工房

BLACK CAT HUMILIATION

—黒猫凌辱。あるいは俺と黒猫の楽しい時間。—

presented by 楓のはらわた